

2016年度教師海外研修(エチオピア) 研修報告書

学校名	桑名市立光陵中学校	氏名	松田 真紀
-----	-----------	----	-------

<印象に残る写真2点>

●写真1 [4074]

これが、わたしの仕事なの

まきを拾い、水を運ぶのは女性や子どもの仕事。まだまだ幼いのに、細い体に大人びた自信と気高さを感じる少女。誰もが、生まれた場所や性別で仕事が決められることなく、選択の幅が広がっていきますように。



●写真2 [4577]

また明日も来てね！待ってるよ！

靴磨きの少年達。赤土でどろどろになった靴を、綺麗に丁寧にみがいてくれた。子どもはみんな、世界共通の宝物。彼らの瞳が曇ることのないように、涙を流すことのないように、私ができることは何だろう。



1. 現地研修に対する各自の目的 とその達成度

(特に、現地研修の経験を生かす授業実践に資することについて)

見る・聞く・味わう・匂う・触るなど、五感で体験したことをどう教材化するのかを考えてデータを振り返ってみたが、写真や動画の多さに驚かされる。自分だけでなく、仲間のフィルターを通して見た世界にも新しい発見があった。英語力が乏しく、現地の言葉も全くわからない私にとっては、言葉の壁が高く、インタビューもアンケートもチームの協力を得て、情報を共有できたことを嬉しく思う。膨大なデータの中から何を選択し、どんな発問につなげれば生徒達の学びが深まるのか、今の段階ではまだ整理がついていない。衣食住を初めとする生活文化を入り口として、エチオピアと日本の違いや共通点、価値観や生き方の多様性、学校や子どもに関すること、支援の在り方や幸せのかたちについて生徒と共に考えたい。そして、遠く離れていてもイメージする力、思いを馳せることの大切さを伝え、日々の生活の中で身近な人と向き合うことが、国際理解のスタート地点なのだと気付かせたい。誰にでも、どこにいても、できるのだと私自身が気付けたことも成果の一つである。

2. 訪問国から学んだこと(気づいたこと、わかったこと、大切に思ったことなど)

(1) 柱1「訪問国に肯定的に出会う」という観点から

どんな食べ物でもチャレンジしてきた私にとって「腐ったぞうきん」と表現されたインジェラという食べ物の味は想像がつかなかった。イタリアに侵略された過去があるものの、植民地にされることなく自国を守り通したエチオピアには独自の文化が根付いており、とても興味深い国だ。誇り高い食べ物の酸っぱさに最初は驚いたが、出逢う日本人が全員「そのうち慣れて美味しくなる」というのを聞き、周りの人から肯定的に出逢わせてもらったなと感じている。特に、青年海外協力隊の小山さんが「嫌いだったのに、今ではすべてが愛おしい」と言ったのが忘れられない。食べ物だけでなく、人も、場所も、景色も、動物も、共通点や、違い、何もかもを受け入れたからこそ得られた感情なのだと思う。嫌いなところですら愛おしく思えるのは、小山さんがそれ以上の何かをエチオピアから得て学んでいるからだと思える。人生をかけて走っている彼らの陸上に対する熱い思いに、心揺さぶられたからだと思う。「最近ゴミをゴミ箱に捨ててくれるようになって嬉しい」と言った笑顔がステキだった。

(2) 柱2「日本と訪問国とのつながりや同一性を理解する」という観点から

どこの国でも、子ども達の笑顔はキラキラしていて宝物だということ。先生の子どもを思う気持ちや学びを深めたいという熱い思いは共通するという。この2点は学校現場を訪問する度に強く感じた。日本が鎖国していたように、他国からの文化の流入を必ずしも良しとはせず自国の文化に誇りを持っていることは、今はなきかつての日本の姿にも思える。また、エチオピアの人々は日本人とよく似ている点もある。例えば、丁寧な挨拶、遠回しなものの表現、大人しくても静かで真面目、おもてなし精神（茶道のようなコーヒーセレモニー）、席の譲り合い、発言するときの小さめで控えめな声。戦後の日本を思わせるような、平屋のトタン屋根、水洗ではないポットン便所、上下水の整備不足、あちこちが穴あきの服、裸足の子ども達。70年経ったら、今の日本のようになるのだろうか？もっと外貨を獲得し、輸出輸入が活発になるのだろうか？と想像がふくらむ。

(3) 柱3「共通の課題について共に考え・共に越える」という観点から

日本の民間企業で進められているカイゼン5Sであるが、これまで転勤してきた学校現場では、何がどこにあるかわからないということが多かった。結局見つけられずに新しく購入して後に見つかり、無駄遣いであった。学校現場にこそ、私たちこそ、毎日を振り返り5Sを実践する必要性を感じる。少し工夫するだけで、効率も上がり、生産性も高まり、質の向上にもつながることは、どこの国でも共通事項である。また、大人を変えるのと同時に子どもも変えていく手立ての必要性も同様である。幼い頃からの習慣やしつけなど、教育に期待される分野も多い。かつての日本、60年代から80年代にかけて経済成長した姿の良い面をエチオピアは真似してほしいが、ゴミや公害という負の側面についても、手を打つのが遅れた日本から同時に学んでほしいと思う。安全な水の確保、付加価値を付けた輸出品、理数科教育、カイゼン導入、職業訓練支援など、多様なジャンルで実務的側面を求められている日本だが、相手を知りニーズを考え、共に取り組み共に目指す気持ちがよりよい関係を気付くのだと実感した。

3. JICAの国際協力事業の「良い！と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

すぐに結果の出るわかりやすい形ではなく地味かもしれないが、長期的に渡ってエチオピアの国力を引き出して伸ばしていけるような支援の仕方は、私たちの教育現場と重なる。また、質の良いものを提供できるという日本の職人魂のようなものも感じる。「相手が欲しい物を、欲しいだけ与える支援は、明日につながらない。」とか「自分で作り、自分でメンテナンスし、自立的に発展していける力をつける。」という言葉は何度か耳にしたが、私自身には、その場その瞬間にできることがなく、チップを渡す時も、現地の子ども達から折り紙を欲しいとせがまれた時も、心はいつも揺れてしまう。途上国に行く度に「あげたい」「あげてはいけない」というジレンマに悩まされてきた。児童労働を推奨するようで、靴磨きをしてもらうのにも抵抗があったが、青年海

外協力隊の牧さんに「労働の代わりに収入を得られるのだという Give&Take、Win&Win のイメージや概念を持たせることも大事」という言葉にも励まされ、少年に2回靴を磨いてもらった。わずかなお金で今日の食事代になるのなら…と思い、長期的な支援ができない自分の行動を肯定することにした。長い時間を待っている間に、助からない命もあるのではないか？という視点ももっているのは悪くないと思う。

4. 訪問先ごとの「感じたこと」や「学んだこと」

④ JICA エチオピア事務所関係者との懇親会 (8/8 と 8/15 シャクラディブス) 【佐藤／松田】

男女共にボディタッチが多く、恋人でなくてもスキンシップの距離が近い。男同士でも腕を組んだり手をつないだりは日常的。名字はなく、自分の名前に父親の名前を付ける。蛍光灯という名前の人もいてびっくり。「不正が許せない人も多く、他のアフリカの国と比較すると賄賂は少ない傾向にある」と聞き、きちんと訴える真面目な国民性と感じた。青年海外協力隊や専門家の方々すべての人に、ドラマがあり、出逢いがあり、チャンスやきっかけ、転機があり、エチオピアという地で今の考え方にいたっているのがステキだと思った。インジェラとおいしいビールを囲んで、エチオピアと日本の文化の違いや、セクハラ、優しい嘘に困りながらも、それを前向きに楽しみ、人と向き合い、エチオピアを愛おしく語ってくれる JICA エチオピア事務所関係者の皆さんを心からうらやましいと思った。(松田真紀)

⑥ チャンピオン商品 (エチオピアン・ハイランド・レザー) 取扱店舗 【松田／吉田】

エチオピアン・ハイランド・レザーは、とても薄く、軽く、柔らかい。3,000 メートルにもおよぶ高地にも関わらず温暖で快適な気候に恵まれたエチオピアで育つ羊は、厳しい寒さから身を守る必要がないので、皮膚がとても薄いのが特徴。最大 0.35 mm まで薄く高密度で丈夫なシープレザーを作ることができる。驚くほど気持ちのよい触り心地。一般的な羊より毛穴の数が多く、その数は1平方センチあたり 1,860 個におよぶ。毛穴の数が多いたる皮の表面は、非常にきめが細やか、まるで赤ちゃんの肌のように柔らかくなめらか。しかしながら、店頭で陳列される商品には、わずかながら細かい傷があり、商品価値が下がるために、国際競争の中で勝ち残るには課題も多い。品質の良いものから輸出され、残った物が国内で消費される傾向にあるのだと聞いたが、今後課題がクリアされ、日本の店頭にたくさん陳列される日が来るのを楽しみにしたい。(松田真紀)

⑫ 飲料水用ロープポンプの普及による地方給水衛生・生活改善プロジェクト 【松田／吉田】

穴からバケツを放り込んで水をくむ伝統的スタイルからの転換をはかるため、飲料水用ロープポンプの普及に力をいれている。従来型のくみ取りでは、人が落ちる、子どもが命を落とす、家畜の糞が入り込むなど、安全な水が供給できない。エチオピア全国民のうち、2人に1人は安全な水が飲めないという。1人あたり20リットルの綺麗で保護された水を供給できるのが望ましい。私たちは、1日1人あたり300リットルの水を使用し、その50%はお風呂とトイレに使われていると知った。飲める水を、ぜいたくに使ってきたこれまでの生活を振り返り、基本的社会サービスが受けられない人々の支援の在り方について考える機会となった。ロープポンプの水は綺麗だったが、バケツで穴から汲んだ水には、ほこりやゴミが浮いていて濁っていた。ロープポンプは身近な材料を使い、自ら作りメンテナンスまでできるという自立型の支援となっているため、今後も普及の拡大が期待される。(松田真紀)

⑰ JICA エチオピア事務所報告会 【佐藤／松田】

8名がそれぞれ自分の思いを5分ずつ語る機会をいただいた。援助の在り方は様々であり、中国のように短期的で目に見える支援もあれば、日本のように目には見えにくい長期的に支援し、国力をつけていく方法もあり、どれが正解だとは一概に言えるものではないということ。自分の当たり前は他者の当たり前ではないと

ということ、幸せとは何か？それは人それぞれであるということ。考え方や価値観、生き方を振り返る時間となった。かつての戦後の日本を思わせるような郷愁めいた感じがあり、便利さを追求した結果、失ったものや捨ててしまったものがエチオピアにはまだ残っていて、それが自国の誇りにつながっていると感じた。この研修期間で強く思ったのは、英語力は必須であるということ、一人よりチームの学びは深いということである。個人の旅行レベルであれば、コミュニケーション力があればなんとかなってきたが、理解し合い、助け合い、深い関係を作ることは言語なしでは困難なのだと痛切に実感した。体験したことを生徒へ還元するためには、よりよい教材を厳選し、どんな発問で生徒の心を揺さぶれるかだと思う。狭いコミュニティで生きる生徒の視野を広げるきっかけを作り、価値観の多様さ、多角的多面的にもものを見る力を養いたい。(松田真紀)

⑱ エチオピアでの飲食全般（各地でのコーヒーセレモニーを含む） [加藤／松田]

伝統的な食べ物と言えば、インジェラ。エチオピアでは、朝昼晩3食インジェラもめずらしくない。でんぷんの発酵食品で酸っぱいクレープのよう。やわらかい絨毯のような雑巾のような手触りで、テフ粉というグルテンフリーの食材で超ヘルシー。2、3センチ四方にちぎったインジェラを右手に持って、ワットというスパイスのきいた肉やおかずを包んで口に運ぶ。親愛の表現の1つとして、お互いにインジェラを食べさせ合う習慣もある。最後までじめないままの仲間もいたが、不思議な酸っぱさと食感に私たちはだんだん慣れ親しんでいった。

日本のおもてなし精神に通じるのが、コーヒーセレモニー。草を敷き詰めた上にセレモニーセットを置き、小さな湯のみの中に濃いめのコーヒーとたっぷりの砂糖、基本的にミルクは入れない。皮を取り除いてよく洗った豆を、小さな平べったい鉄板の上で15分から20分ほどかけて、じっくりと炒った後、豆を砕いて粉末状にし、ジャバナという素焼きのポットで煮立てる。準備が始ってからコーヒーが出てくるまでに1時間から2時間かかることもあるが、時間をかけてみんなゆっくり会話を楽しむためのものとして、人々の生活に深く根ざしている。(松田真紀)

5. 来年度参加する先生へのアドバイス（持ち物、必要な準備、学びの視点、注意事項など）

最初は緊張していたものの、後半慣れてきて、半袖になったり、気を抜いて寝たりしたせいで、帰り際になって複数箇所ダニに刺されていることに気付いた。帰国してからは、どんどん痒みが増して皮膚科に直行。虫対策は、どこに行くにしても必要。

現地の食を味わうという視点から、特に食品を持参する必要はないが、栄養ドリンクや、粉末ポカリスエット、ゼリーなど、体調が弱った時に即効性のある吸収率の良いものがあると良い。

現地の薬の調達は困難なので、風邪薬、胃腸薬、酔い止めは持参するに限る。

貨幣は、ドルをどれだけ現地通貨に換金するかは仲間と話し合い進めた方がよい。宿泊先や食事の場所、買い物する場所など、行くところは全員同じ行程なので、たいてい同じ金額でなんとかなる。

出発前は現場の仕事が忙しいが、できるだけ連絡を早めにとり、お互いを知り仲良くなる機会を持てると早めの準備が出来て、あせることがない。現地での出し物や交流に必要な準備が、もっと十分にできたのではないかという思いが強い。また、遠慮なく意見を言い、否定せずに受け入れたり、自分とは違った視点や多面的な視野を持つチャンスに変えたりと、どこでも誰からでも学ぶ姿勢を忘れないことが、とても大事だと思う。

6. その他全般を通じての感想・意見など

最後の報告会の中でも一番印象深いのは、JICAの神所長の言葉だ。「希望と自信を育てること」それは、自分の進んでいく道が見えること、その道を進める力を持っているのだと自分で感じることなのだ。JICAの活動に携わった日本人にも、支援を受けた現地の人々にとっても共通する内容に、教育現場にいる私自身が、深く共感できる言葉だった。また、人生とは自分の居場所を見つけること、幸せをはかるものさしを持ってい

ることだと気付かされた。「幸せの基準は何ですか？」と神さんに問われても、じっくりとした答えが見つからず答えられなかった。「自分の道を選択し、自分で決定できること」だと今までは思ってきたが、果たしてそうなのかどうか、帰国した今もまだうまく答えられない。「development=発展とは、もともと、その人やその国の持つ力を引き出すという意味。ラテン語の education に通じる」という。私たちの日々の実践がいかに大切か、世の中や世界をより良く変えていく可能性を秘めているか、改めて実感した研修となった。最後に、私たちを支えてくれたすべての人々、この機会を与えて下さったすべての人々に感謝したい。ありがとうございました。

以上

